
死のポーカーを始めましょう。アンティは貴方たちの命よ。

オクト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死のポーカ―を始めましょう。アンティは貴方たちの命よ。

【Nコード】

N8326K

【作者名】

オクト

【あらすじ】

陽楼高校に通う真堂衛人とそのクラスメート達は、秋の就学旅行でヨーロッパの小国に向かったのだが、とある古い砦の中で突然神隠しにあう。訳も分からず困惑する衛人達の前に不敵な黒衣の女性が現れ、「元の世界に帰りたければ、戦い続けなさい」と告げられる。

プロローグ――柄違いのロイヤルなストレート（前書き）

十二人の男子生徒達が、理不尽な死のゲームを乗り越えるために剣や魔法等でモンスターを倒して行く、異世界バトル物青春小説です。

ブローグ——柄違いのロイヤルなストレート

「でやあ！」

叫び声一閃、学生服姿の真堂衛人^{しんどう えてい}が振り下ろした白銀の騎士剣は、人型をしたのつぺらぼうの怪物『マネキン』を両断した。

左右に断ち割れたマネキンが、両の切断面から紫色の体液をまるで吊り橋のように滴らせながら倒れ込んで行く。それを見届ける間も無く、衛人は更に二体のマネキンを斬り伏せる。

次の敵を見定めようと顔を上げると、およそ百メートル先にマネキンと同系統の人型の怪物達が犇めき合い、両腕を伸ばしてこちらに近付いて来ているのが見えた。その動きはさながら映画に登場するゾンビそのものだが、伸ばされた両腕の先にあるものは、鋭利で長い硬質の爪だ。

ざっと見て、その数は軽く五十体はいるだろうか。

最初マネキンを見た時は自分の目を疑い、騎士剣を構えて対峙した時は膝が笑い出すぐらいに恐怖したもののだが、今では倒すべき敵と認識している。

地面に転がっている斬り捨てたマネキンを跨ぐと、衛人は騎士剣を腰だめに構える。

数回呼吸を繰り返すと、前方のマネキン達の群れを見据えて、駆け出した。

と、その横を両刃の戦斧を携えた黒ジャージ姿の深町浩太^{ふかまち こうた}が追走して来た。更にその隣には、三叉に分かれた槍を手にY O U R O U H I G H S C H O O Lの文字がアーチ上に縫い込まれている濃紺のウィンドブレーカーを羽織った緒方光圀^{おがたみつくに}がいた。

二人の得物も、衛人と同様に山葡萄を塗り付けたような真紫色に染まっていた。

「割とせっかちなんだな、お前」

走りながら浩太が、柔道で鍛え上げた逞しい体格に相應しい豪快な笑みを浮かべる。

「単独行動は危険、だぞ」

光圀も、長距離ランナーとして絞り込まれた体躯同様の、ふ、と口元にストイックな笑みを浮かべて見せる。

諫められた筈の衛人だったが、思わず顔を綻ばせていた。

衛人、浩太、光圀の三人は互いに顔を見合わせた後、揃って正面を見据えた。

目指すは、マネキン達の集団。

その時、衛人と浩太と光圀の頭上をひゆるひゆるひゆる、とやや間の抜けた音を上げて飛んで行くものがあつた。

急に影が差したので顔を上げた三人はそれを見て、もう一度顔を

見合わせて急制動を駆ける。

同時に、

「おーい！　今、ボクの凄んごい魔法が完成したから、ちょっと避けてねー」

衛人達の後方から、ひよろりと背の高い姫川ひめかわはじめが姿を現し、先端部に詰められた水晶がきらきらと光る魔法杖をぶんぶんと振ってみせる。

「ま、待て！　ふざけるな！」

「タイミング考えろよ、姫バカ！」

「緊急停止、だ」

三者三様に叫び（一人は呟き）、それぞれがスニーカーの靴底が熱く感じる程の急ブレーキをかける。

そして、衛人達の上を通過していった火の魔法、燃え盛る巨大な炎の塊がマネキン達の集団に向かって落下した。

どおおおん、と腹の底に響くような爆発音と共に、日曜朝の子供向け戦隊物番組でしかお目にかかれないような盛大な火柱が上がる。同時に相当量の熱気と爆風が押し寄せて来て、衛人は騎士剣を地に突き刺して片方の手で顔を覆った。

火の魔法の着弾とその衝撃で吹き飛んだ土塊がぱらぱらとにわか雨のように降り注ぎ、ようやくそれが止んだ頃に衛人は手を下ろした。

衛人の視線の先では、直径十メートルはあろうかというクレータ
ーがぼつかりと口を開けており、十体以上いたはずのマネキン達の
殆どがその原型を留めずに千切れ飛んでいた。

「凄え威力だな。これが魔法かよ」

浩太が、戦斧の柄を肩に担ぐようにして呟いた。光圀も、無言の
ままクレーターの方を見詰めている。

「これでもう、今日の分は終わったんじゃないのか？」

浩太が同意を求めるように、こちらを向いた。

衛人は地に刺していた騎士剣を引き抜くと、肯定のつもりで頷こ
うとした時、近くの草むららが、がさりと音を立てた。

思わず身構えた三人の前に、浩太と同じ黒ジャージ姿の櫛崎勇馬
が現れ、

「まだだ。本陣が来る」

そう言って、背中に括り付けていた弓を外して弓手に構え、同じ
く背負っていた矢筒から一本を引き抜く。

「本陣？」

衛人の言葉に、勇馬が矢を弓の弦に乗せながら頷く。

勇馬が鋭い目付きで見詰める先を、衛人も見る。

そこには、先程一瞬で消し飛んだマネキンの集団の五倍はあろうかという大集団が、そろそろとまさに人海と呼べるような様相を呈してこちらに迫って来ていた。

「こりゃ、姫バカの魔法が本格的に必要なだな」

「呼んでこよう」

言い様、光圈が風のように後方へと駆け出して行った。

「それなりに数を減らしたつもりだったんだがな」

皮肉そうに呟く勇馬だったが、見れば朝にはたつぷり矢が詰まっていたはずの矢筒が、もう数本しか残っていない。

「後ろに下がってくれ。疲れているだろうし、無理をする必要はないさ」

「いや、戦いには最後まで加わりたいんだ。矢が尽きて、氷室^{ひむろ}に作ってもらった石ナイフがある」

「でも……」

口ごもる衛人。

「良いんじゃないのか、衛人」

明るい口調に、衛人は声のした方を振り返る。

そこには浩太が、にかつと白い歯を見せて笑っていた。

「浩太……、だけでもしもの事があつたら」

「心配性でもあるんだな、お前。けどな、ここには俺がいるし、姫バカと、姫バカを呼びに言つた光圀だっている。そもそも、五人全員が生き残る、誰一人死なない。そのための人員配置だつたろう。それに、今回の俺達は柄こそ揃わなかったがロイヤルのストレートだった。さつさとマネキン共を倒して、全員一緒にエリュシオン砦に帰ろうぜ」

エリュシオン砦。

浩太が口にしたその言葉が、衛人の胸に不思議な重みを持って受け止められた。

皆が待っている砦。

そう思っただけで、自然と力が湧いてくるようだった。

衛人は騎士剣を握り直すと、決然とした眼差しでゆっくりとだが確実に迫り寄る怪物達の大集団を睨み据えた。

黒蝶の女

混濁とした乳白色の霧によって、周囲が覆われ始めている。

つい先程、最後の一体となったマネキンを光圈の槍が刺し貫いた時からだ。

「ふー、やっと終わったぜ」

伸びをするように、浩太が戦斧を両手にしたまま腕を頭上に上げる。

五人の中で最も多くマネキンを倒したくせに体力の陰りが全く見えない浩太に、衛人は関心するような呆れるような顔をする。

「おいおい衛人、もう蝶々女のゲームは終わったんだぜ。少しぐらいリラックスしたって良いだろ？」

そう言っ、浩太は戦斧を片方の手に持ち帰ると空いた方の手で衛人の背中をばんばんと叩いた。

肺に直接響く程の結構な力に、衛人は眼を白黒させる。

「油断は禁物、だ」

前後左右をそつなく見回しながら、諭すように光圈が言つと、

「俺も緒方の意見に同感。気を抜くなよ深町」

勇馬も弓手には弓を、馬手には氷室の手製である握り拳を二つ繋いだぐらいの大きさの石ナイフを手にしていた。矢筒には一本だけ矢が残っていたが、最後の最後で使ったものだろう。

「そうそう。何が起きるかぜーんぜん分からないんだから、気を抜いたら駄目駄目じゃん。全く、バカは筋肉だけにして欲しいよ」

一が首の後ろに回した魔法杖にリーチのある両腕を引っ掛けて、きつい言葉を放つ。

「ちょ、ちょっと待てお前ら。つか、一！ お前だってリラックスしまくってんだろぅが！」

浩太が声を荒げるが、一は何処吹く風でこくりと首を傾げている。そして、ふふつと笑顔を見せると、

「ボクはいーの。キミ達を守ってくれないと魔法を完成させられないんだから」

そう言った。

それを見た途端、浩太はうげつという顔になる。

姫川一は高身長で甘い顔立ちをしており、それだけで過半数の女性から確かな好意を得られるのであるが、ここには男が姫川一を含めて五人しかない。

姫川一がアドバンテージを築くには、状況が状況だった。

いや、例外として女性が一人いた。

そう、衛人達五人を、いやエリュシオン砦で待っている者達を合わせたら計十二人の男子高校生を連れ去った女が。

「御苦労様でした。なかなかの見応えでしたわ」

鈴の鳴るような女の声が衛人の頭上から聞こえてくると同時に、白い霧の一点が晴れて黒いハイヒールを履いた足が現れる。

そこから白い素足が現れたかと思うとふんだんにフリルをあしらった、しかしそのどれもが黒で統一されたスカートがおりて来て、それが花弁を逆さまにしたように窄まって行く。そして最も細い箇所を越えると再び広がり始め、女性らしい胸の膨らみと白い鎖骨と肩口が現れ、遂に浩太の言った通り、蝶々女に相応しい翅を広げた黒蝶をあしらったマスクで目元を隠している女が降りてくる。

しかし、完全には下に降り切らず、五メートル程の高さで停止する。衛人達五人に取り囲まれる危険を冒さないためか、それとも両者の立場の違いを明確化させるためにか。

俄かに衛人達に緊張感が漲る。一でさえ、先程までのマイペースめいた微笑が引っ込ませている。

瞬間、勇馬の右手がムチのようなしなりを見せて背中矢筒から最後の矢を引き抜くと、蝶の女に狙いを定めた。

だが、蝶の女は勇馬の行動を先読みしていたかのように、落ち着いた仕草で右手に持っていた孔雀の扇子を横に振るう。

途端に孔雀の扇子から光の粒子が溢れ出して、それが帯状の形を

取ると衛人達五人を瞬く間に取り巻いた。

「何だこれはっ！」

浩太が怒りの声を上げて身体に纏わり付く光の鱗粉を振り払おうとする。光圀と勇馬は浩太程ではないが、群がる羽虫のような無数の光を手で振り払っている。一はきょとんとした表情で渦巻く光の中にあって棒立ちであり、衛人は突然の事に身体が動かず、ただ光の鱗粉から眼を守るために手で顔を覆うしか出来なかった。

光の粒子の乱舞は突然現れた時と同じように唐突に終わり、遡る五本の小川となって蝶の女の扇子へと戻って行く。

光が止んだ事を知り、衛人が顔から手を下ろすのと一が叫ぶのはほぼ同じだった。

「ああっ！　ボクの杖が無くなってる！」

頭から出ているような一の声に、衛人は思わず自分の手を見る。

今まで確かな感触と共にそこにあつた筈の騎士剣が、忽然と消えていたのだ。

浩太、光圀、勇馬も同じらしく、特に勇馬は蝶の女に向けて矢を^{つが}番えていた事もあり、悔しそうに口を一文字にしている。

と、蝶の女が、衛人ら五人の注目を集める事が明白な含み笑いをした。

まるで磁力に引き寄せられる金属片のように、衛人達の敵対的な

感情の矢が向けられる。もっとも、一だけはその矢に鋭利さは足りていないようだったが。

だが、蝶の女は気にする様子もなく、扇子を一振りすると再度光の粒子を溢れさせた。

光の粒子は、今度は十本の帯となって衛人達の面前に降りて来る。

五人はまた纏わり付かれるのかと警戒したが、光の粒子は中空に均等に位置された前後五箇所ずつの計十箇所に集約されていく。

そして、一際光が強くなったかと思うと、そこには十枚のトランプのカードが現れていた。

普通のトランプより倍以上に大きく、蝶の女と衛人達との調度中間にあってもそのカードは良く見えた。

この光景を見るのは、衛人は三度目だった。だから、奥側のトランプカードの五枚が蝶の女の手札だと分かる。

衛人が蝶の女の手札を確認するよりも早く、

「私の役は、^{ハンド}ハートの八とスペードの八、クラブのジャックとダイヤのジャック、それにダイヤの三を含めたツーペア」

と、言った。

確かに、蝶の女の言う通り、ツーペアの手札だ。

蝶の女は言葉を続けた。衛人達が、自分達の手札を知っており、

尚且つこの場で実際に見えているのだ。

「対する貴方達は、クラブの十」

浩太が苛立たしそうに舌を鳴らす。これは浩太のカードだ。

「スペードのジャック」

光圀の顔も少しだけ変わる。浩太とは違って感情的ではないが、自分が物のように扱われている事に不快に思っている事は間違いない。

「ダイヤのクイーン」

「あ。ボクだ」

脳天気な声を一が上げる。確かに、あのカードは一だった。

「ハートのキング」

衛人のカードが口にされた。思わず右手を握る。あのカードが、白銀の騎士剣に転じていたとは、今となってはとても信じられない。

「スペードのエース」

勇馬のカードだ。当の本人は、蝶の女を無言のまま眺め遣りながら石のナイフを手の内で弄っている。一見すると退屈そうにしているように見えるが、眼は鋭かった。次なる攻撃の機会を窺っているのだろう。

何しろ、今こそが蝶の女と相對する唯一の時間なのだから。

あの時、勇馬の行動があと一瞬早ければ、蝶の女に矢を射る事が出来たのだろうか。出来たのなら、殺せたのなら……元の世界に帰れたのだろうか。

衛人は分らない。

だが、このままでは何時まで経っても蝶の女の手の内にいる事は、今回で三回目の対峙となるが嫌という程理解していた。

「役はストレート。柄違いですが、絵札で揃えてきたというのが面白かったですね。今回のゲームは、貴方達の勝ちです。それでは、はいとう配当をどうぞ」

そう言って、蝶の女が三度孔雀の扇子を振るう。

途端に十枚のカードは再度金の粒子となって弾けて消え、その内の幾つかが金貨へと変じると、衛人達の目の前まで降りてきた。

四枚の金貨が、衛人の顔の前で宙に浮いている。

浩太や光圀達の前でも同枚数の金貨が浮いている。

ゲームの勝利の対価だったが、誰も素直に手を伸ばして受け取るうとはしなかった。唯一、一だけが金貨に触れようとしたが、他の四人が受け取ろうとしていない事に気付いて慌てて手を引っ込める。

「受け取らないのですか？ その中の一枚は、貴方達それぞれの命アンティなのですよ。……まあ、そのまま死にたいのであれば、私は構いま

せんが」

蝶の女が、口許を扇子で隠してふふっ、と晒う。

ち、と勇馬が舌打ちをして、目の前に浮かぶ四枚の金貨を受け取った。石のナイフを下げている。戦う機会はないと察したのだろう。

浩太もがりがりと頭を掻きながら、光圈は無言のまま、一は「何を躊躇ってたんだよ」と言わんばかりにブーたれた顔で、それぞれ目の前の金貨を受け取る。

衛人も、宙に浮いたままきらきらと輝く金貨に手を伸ばす。

ずしり、と確かな手応えと共に、四枚の金貨が衛人の手の平にある。と、手の上にあつた四枚の金貨の内、一枚が赤い血の色のような粒子に変わると、音もなく衛人の胸元へと吸い込まれて行った。

痛みも何も感じなかったが、金貨の一枚が自分達の命だと言われているだけに慣れる気分は全く湧いてこなかった。

「それでは、次なるゲームでお会いしましょう。御機嫌よう、皆様方」

蝶の女は口許に笑みを浮かべてそう告げると、出現した時と同様に頭上に生じている濃厚な白霧の中へと消えて行った。

戻る道すら

衛人達の周囲を覆う濃密な白い霧の一箇所が、まるで出口を示すように晴れて行く。

五人の足は、自然とそちらに向かって行った。

「畜生……、あの女の思い通りって感じがするのが、全くもって気に入らねえぜ」

無言に耐え切れなくなったのか、浩太が吐き捨てるように呟く。

「そうは言っても、現実その通りだしな。待つしかないだろ、今は」

勇馬が浩太の言葉に応え、続けようとした時、

「お腹、減ったあ！」

一が、子どものように喚いた。

絶句する四人。

「うつせ姫バカ！ 子どもかお前は！」

浩太が苛立たしげに言うが、一が意に介した様子はなかった。

「だって朝にユリの球根みたいなのを食べただけなんだよ。ボクが肉弾キヤラじゃないから運動してないように見えてるみたいだけど、魔法を使うととっても疲れるんだよ！」

「こつちだつて疲れてるし腹も減ってるんだよ！ お前だけじゃねえんだから、一々喚くんじゃねえよ！」

「何だよこの筋肉バカ！ 大体、今回の戦いで一番敵を倒したのは、このボクなんだよ。誰のお陰で勝てたと思ってるの！？」

「……お前、自分だけの手柄だと思ってるのか？ いい加減にしろよ！」

怒気も露わに浩太が一に掴み掛かろうとする。

「ま、待てよ二人とも！」

思わず衛人が浩太と一の間に割って入る。

浩太の身長は衛人とあまり変わらないが、全身筋肉の塊のようで肩幅が段違いだった。

相對すると、その迫力にたじろぎそうになる。

「黙ってる衛人！ こいつには、一回分かせてやった方が」

浩太が衛人を半ば力付くで横に退けようとした時、

「姫川の言葉、一理ある」

静かな口調で光圀が言った。

「な？！ 光圀お前！」

浩太が驚いたような顔で光圀の方を振り向く。一も、まさか自分の援護がされるとは思っていなかったらしく、ファイティングポーズを取ったまま両眼をぱちくりさせている。

「空腹は、良くない」

光圀が、何時も通りの無感情のまま言葉を紡いだ。

一瞬の沈黙の後、笑い声が上がった。勇馬だった。

「そつだそつだその通り。深町も姫川も、二人して折角のカロリーを無駄に消費させるなよな。第一俺達には、今すぐやらなきゃならない事があるだろう」

勇馬はそう言うのと、そこだけ空間が開いてトンネルのようになっている霧の先を指差す。

待っている者達がいるのだ。衛人達の帰りを待つ、同じ境遇の七人のクラスメートが。

「……ああ。そつだった。砦で待ってる連中も気が気じゃないだろうしな。早く帰って安心させてやるか」

浩太が首をゴキゴキと鳴らすと、衛人の方を向いて、

「衛人、さっきは言葉が悪かった。すまねえ」

そつ言って頭を下げてから晴れ行く霧の向こうへ駆け出して行った。

「あ！ この脳筋、一番はこのボクだ！」

何を勘違いしたのか、一が浩太の後を追いかけて行く。長い足を駆使したストライド走法であつと言う間に浩太に追いつきそうになるが、

「追っ掛けて来るんじゃないよ！ 気味悪いだろうがてめえ！」

一に向かつて怒鳴ると、若き熱血柔道家は追いつかれまいと更に加速して行く。

「何やってんだか、あいつらは。……しかし、疲れてるって言うてたくせに凄い体力だな。柔道部とバスケット部の練習って、そんなにハードなのか？」

突然の勇馬の質問に、帰宅部の衛人は答えられずに光圀の方を見る。

光圀はす、と視線を上に向けて何かを思い出しているようだったが、

「屋内の部活動だから、良くは知らない。だが、陽楼の柔道部もバスケットボール部も、常に県大会で入賞している」

衛人もその事は知っていた。

陽楼高校は学力においては県内で中堅に位置する県立高だが、創立は古くその当時から文武両道を掲げている。そのため各運動部の大会が行われる度に、優勝を果たした部活動の名や、上位入賞した

生徒の名を記した垂れ幕が校舎に下がっているのが常だった。

「成る程。体力の程は、察して余りあるって所か」

「櫛崎の集中力も、凄いと思う。大会の前に、教えて欲しいぐらいだ」

急に自分が褒められた事に、勇馬は苦笑する。

「弓道部員のこの俺が、まさかこういう所で活躍するとは思ってても
みなかったけどな。もっとも、和弓だったら尚良かったんだが。…
…それに、俺の事を言うよりも先にまず真堂だろう？」

いきなり自分の話になったので、衛人は驚いた顔になる。

光圀も「そうだな」と言っ、小さく頷く。

「俺は、別に…ただの帰宅部だから」

「違う違う。別に部活の事を言ってるんじゃない。三連続だろ、このゲームに参加したのは」

「それは、俺のカードが良かったから」

「それだ。カード運の良さだよ」

勇馬は言葉を続けた。

「確かに深町や姫川の体力はずば抜けてる。だけど、カード運にバ
ラつきがあるんだ。これは、本当にポーカーなんだよ。トランプカ

ードが武器になってモンスターと戦う無茶をやらされているけど、そんなのは副次的な物に過ぎないんだ」

そこで一旦言葉を区切ると、先に行ってしまった二人の方を眺め遣ってから衛人の顔を向いて、

「良いか？　どんなに腕力に自信があるうが足が速かるうが、ポーカーの役にならなきゃ意味がないんだ。それも、絶対にあの女に勝つ役じゃないとな。その点、真堂には抜群の引きがある。正直、三連続キングは凄いで？　それと」

勇馬は、ぼんと衛人の肩を叩いた。

「深町を、良く止めてくれたな」

「あ、いや、あれは……」

「ああいうのは、咄嗟に出来るもんじゃないぜ。まあ、姫川の我が俣っぶりも度を越してるが……やっぱり、リーダーに向いてるよ。真堂は」

勇馬はそう告げると、すたすたと霧の向こうへと歩いて行った。

突然の勇馬の言葉に戸惑う衛人。

と、その横を無言のまま光圀が通り過ぎて行く。一瞬、衛人と眼が合つと僅かに頷いただけで、歩みを緩める事はなかった。

一人取り残されたような形になった衛人だが、高揚と不安が入り混じった複雑な感情を抱えながら、先に行く四人を追いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8326k/>

死のポーカーを始めましょう。アンティは貴方たちの命よ。

2010年10月10日19時50分発行